
君が

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が

【Nコード】

N3756W

【作者名】

ユウ

【あらすじ】

「女の子って苦手ってか嫌い。」

でも最初から嫌いだったわけじゃない。あいつがそうさせたんだ。そんな時に俺はあいつに再開してしまった・・・。

女嫌い

「和泉くん、いきなりごめんね。」
きれいに染められた茶髪。

「うん、大丈夫。」

俺がそういうと女の子は俺を見つめた。
白い肌は少しピンク色に染まっている。

「あのね、私……。」

女の子はまた少しうつむいて話し出した。

「ずっと前から和泉くんのこと気になってたんだ。」

この子、結構モテるって聞いたことがある。

「こんなあたしでよければ付き合っしてほしい……です。」

めちゃくちゃかわいいのに、『こんなあたし』なんて。もっと自信
持てばいいのに。

男としてはこんなかわいい子に告白されるなんて嬉しいのに。

でも

「ごめん。俺、誰とも付き合っ気がないから。」

女の子って苦手。ってか嫌い。

女嫌い

「そっか……。ごめんね。」

そういつて女の子は教室を飛び出していった。

俺はため息をつく。

「あゝらら」

その声を聞いて俺はさつきより深くため息をついた。

「盗み聞きサイテー。」

教室に入ってきた牧陽太マキ ヨウタはわざとらしく弁解をする。

「いやいやいや、俺はただね？お友達の和泉風磨くんイズミフウマって子と一緒に帰ろうと思つて教室に來ただけなんだよ？そしたらそのお友達の風磨くんがちょうど告白されてさ。参つた参つた。まあごめんね」

「はいはい。」

「……。で？なんで振つちやつたの？？」

こいつ……。ズバツと聞くな。

「なんでつて……。」

「平井理央ちゃんヒライリョウ、高校1年生。茶髪のセミ。部活はバレー部で中学からやつている。明るく、みんなに優しい、そしてさらに頭もなかなかいいという、素晴らしい女の子です。」

「……。」

いきなりさつきの女の子の情報をしゃべりだす陽太。

それにしてもなんでこんなに人の個人情報しつてるんだろう……。気持ち悪い。

俺の気持ちを察したのか

「ちなみに杏里ちゃんアンリ情報でつす」

杏里ちゃんとは陽太の彼女。陽太は俺と違ってすぐ彼女ができる、その分破局も早いけど。

「ああ・・・そう。」

「で？なんで振っちゃったの？」

結局それを聞くのかよ・・・。

とか思いつつ

「うーん・・・なんとなく？」

「なんとなくってお前・・・ひどいやつだな（笑）」

「まあ、好きでもない人と付き合っても楽しくないし。」

「なるほどね。・・・とか言って朱音ちゃんのこと思い出しちゃ

うんだろ？」

「・・・。」

・・・こいつはなぜこんなに勘が鋭いんだろう。俺がわかりやすすぎるのかもしれないけどさ。

泉朱音というやつ（前書き）

こんにちわ（・・）

なんかめっちゃくちゃ文章力なくて困っています（笑）

ここから風磨の中学時代のお話に入ります。

一応風磨の回想、という設定です。

泉朱音というやつ

中学校の入学式から俺はあいつのことが頭から離れなかった。印象が強すぎたのだ。

俺の中学校は結構上下関係が厳しいらしく（特に女子が）小学校の時茶色い髪だった女子はみんな黒く染めなおしていた。

小学生で髪染める時点でおかしいだろ。とか思っていた俺はあいつを見た瞬間言葉を失った。

オレンジに近いくらいに明るい茶髪。

みんながひざ下までおろしているスカートはあいつだけ太もも丈。同じクラスの奴らもチラチラ見ていた。

もちろん先輩たちは思いつきり睨みつけていた。

それでもあいつ、泉朱音イヌミアカネは気にすることなく悠々と歩いていった。

まあ、俺がそいつの名前を知るのももう少し後になるけれど。

6

泉朱音とは違うクラスだったけれどよく噂になっていた。

？母親がレディー・ス総長？　？ケンカしたら相手を必ず病院送りにする？　？すでにやり終えている？

クラスの中で地味な方だった俺でも、あいつに関しての情報はよく耳に入ってきた。

でも俺は興味もなかったし、接点も全くなかった。

そしてそのまま2年生へ進級した。

泉朱音というやつ

地味な俺は比較的平和に1年を過ごした。

そして2年生の始業式。クラス表を見る。

『2年3組』一番上に書かれていた自分の名前。

1ということは出席番号1番か・・・。

自分の名前だけ確認して教室へ向かう。

教室に入ると去年から一緒だった奴もいる。

「風磨今年もよろしく」「また一緒か！」

そんな会話をしながら自分の席に座る。出席番号順なので窓際の1番前だ。

まだ隣は来ていない。自分の名前しか確認していないから誰が隣かわからない。

1別に興味ないからいいや。

鐘が鳴る直前だった。

「ねっむ〜。てかありえないんだけど。」

「まーまー！じゃああとで〜」

そんな声が聞こえてすぐにドアが開いた。

クラスの視線が集まった。

泉朱音だ。1年のころより髪の色が明るくなっている。

泉朱音は俺の隣の机に向かって歩いてきた。

「いずみくん？」

その目は好奇心でキラキラ光っている。

「そうだけど。」

「まじ？一緒の苗字なんだけど！あ、でも字は違うんだっけ？ま、いーや。あたし朱音。呼び方はなんでもいいから。」

クラス全員の視線が集まっているがそんなことは全く気にしていない。

「てか、1番前とか無理なんだけど。知ってる人いないしまじありえねー。ま、いずみくんと話すからいや。」

「なんちゃって。と笑って席に着く。」

「よろしく。」

そういつて笑った泉朱音の笑顔を俺は忘れないと思う。
校則違反のピアスが耳元で光っていた。

泉朱音というやつ

「で、いずみなんて言うの？」

「和泉風磨。」

「へ〜。」

フーマ。とつぶやくように泉朱音が言った。

そのとき先生が入ってきた。泉朱音を見て少し眉をひそめる。

「泉朱音、髪の毛明るくなってないか？」

その言葉に

「え〜？気のせいじゃない？これ地毛だもーん。」

「そんなわけあるか。この前はもう少し暗かったぞ。」

確かに、泉朱音の髪の毛は金に近い。

「あたし知らないし。朝起きたらこうなってた。魔法じゃない？」

「お前教師をおちよくってんのか？」

「全然。てかうちら呼びにきたんでしょ？じゃあ早く動こつよ。」

そいつって立ち上がる。

先生は何も言わず廊下に整列させた。小学生みたいに背の順で並ばされる。俺も後ろに並ぶ。

「風磨。」

振り返ると隣のクラスの友達、シズハラ 静原 タクマ 拓馬だった。

「泉朱音の隣なんだって？」

「ああ、うん。びっくりした。」

「あいつ、今4組の牧ってやつと付き合ってたんだろ？」

「誰それ。」

「しらねーの？牧 陽太。泉朱音とよく一緒にいるやつで付き合ってるって噂。」

「へえ〜。まあいや。じゃあ俺行くわ。」

「おー。」

別に泉朱音が誰と付き合っつていようと関係ないし、どうでもいい。泉朱音は後ろの方でつまらなそうに髪の毛をいじりながら歩いている。

体育館に入って始業式が始まった。

始業式といつても校長挨拶や、担任発表だけだ。

担任は体育教師の森田先生だった。森田先生は若くて女子に人気がある。泉朱音以外の女子は喜んでいた。

教室に戻ってロングホームルームを終える。

「じゃあ今日はこれで下校な。」

号令をかけると教室のドアがあいた。

「朱音ー帰ろうぜ。」

黒髪の長身男だった。髪の毛がふわふわしている。

「牧くあたしの髪魔法かかってるさ。」

？牧 陽太。泉朱音と付き合ってるやつ？

俺の頭の中にさっきの拓真との会話が流れてくる。

「なんだよそれ。」

「自然に色が変わるの。明日は金パになってたりして。」

「泉、それはやめてくれ。」

森田先生が苦笑している。

「自然に変わるからどうしようもないし。」

そういつた泉朱音と目が合う。

泉朱音は少し笑った。そして

「フーマばいばい。」

そういつて教室から出て行った。

少しして俺も何事もなかったように家に帰った。

泉朱音というやつ

次の日、森田先生が出席をとっているとき泉朱音はきた。相変わらずパンツが見えそうなくらいの短いスカート。髪の毛の色は明るい茶髪のまま変わっていないかった。

「お、泉。もうちょっと早くこいよ。」

「だって陽太おっせーんだもん。」

「牧か。おいてこいよ。」

先生は笑って言った。

「だめ。陽太いないと電車のれないのあたし。絡まれるから。」

「それはお前の外見のせいだろうが。いいや、とりあえず明日は遅刻しないように。」

「んゝ頑張る。」

泉朱音は少し笑いながら席に着く。

「フーマおはよう。」

俺はすこしびっくりして泉朱音をみつめた。

「フーマなしたの？おはようってば。」

「ああ、おはよう。」

俺が返事をするとう泉朱音は満足したように席に着いた。

「風磨お前泉朱音とあいさつしたな！！」

HRが終わってすぐ俺の席に来た友達が好奇心いっぱい顔でやってきた。

泉朱音は鐘が鳴ってすぐどこかへ行った。多分牧陽太のところだろう。

「挨拶だけだろ。」

「そうだけど〜。」

といっても俺も挨拶されてびっくりしたのだけれど。

「あ、そういえばさ、泉朱音の彼氏の牧陽太っているじゃん？」

やっぱり彼氏なんだ。そう思いながら

「それが？」

と聞いた。

「あいつ、こないだ泉朱音じゃない、しかも高校生らしき女の人と歩いてたさ！」

「へ〜。」

「なんだよ風磨、興味なさそうだな。」

「だって俺に関係ない人の話だし。」

「ハハツ風磨らしいなっ。でもあの泉朱音が浮気されてるなんてかわいそうだな〜。」

なんだかこの話を聞いてるとイライラしてきた。

「まあ関係ない人の話なんだから俺らがなんか言っても意味ないからいんじゃない？」

友だちはつまらなさそうな顔をして「そうだよな〜。」といって席に戻っていった。

その時だった。

「ふざけんじゃねえよ！」

廊下から響いてきた怒声。

教室にいた人たちはみんな廊下に行った。俺はそんな興味もないので席に着いたまま。

「いちいちうつせーんだよ！」

「ハア！？牧くんに迷惑かけてんのあんたでしょ？」

「なんででめえに言われなきゃいけねえんだよ！！そんなの陽太の勝手だろーがよ！」

「牧くんこれ以上迷惑かけないで！！」

響く2人の女子の声。聞こえてくる女子の声を流しながら窓の外を見る。

女って本当面倒くさいな・・・。

「そうやって和泉くんにも迷惑かけるんでしょ！！？」

・・・は？

いきなり出てきた俺と同じ苗字にびっくりした。

多分俺ではないと思うけど・・・。

でも教室から廊下の様子を見ていたみんなは一斉に俺を見た。

「なんでそこでフーマが・・・。」

フーマってまさか俺？

少し動揺した。

俺が何で2人のケンカの話に出てくるんだ？

「知ってんのよ！あんたが和泉君のこと・・・。」

「うつせーよ！黙れ！！！」

「おい泉朱音なにやってんだ！」

どうやら先生がきたようだ。

「なんであたしだけなんだよ！」

「あなたの普段の生活がダメだからじゃない？そんなんじゃない？和泉君にフラれちゃうかもね！」

全く話が理解できなかった。友だちも俺と廊下の様子を見比べている。

「うつせーよ！！！」

「おい！泉朱音！」

人をかき分けて教室に入ってきた泉朱音。

俺も入ってきた泉朱音を見た。

目があった。

泉朱音は多分泣いていた気がする。

目が合うと泉朱音は少し笑った。

そして

俺は泉朱音に手をひかれていた。

初めてのサボリ。そして

気が付けば俺は泉朱音に手を引かれていた。
泉朱音は廊下を走る。たまに誰かにぶつかる。
すれ違う人はみんな俺らを見る。

泉朱音と俺は無我夢中で走っていた。
俺は走っているとき何も考えていなかった。
俺も男だし泉朱音の手を振り払うことは簡単にできた。
だけど、この手を離したくはなかった。

5月の少し冷たい風と泉朱音とつながれた手から伝わってくる温度
が気持ちよかった。

そのまま俺らは階段を駆け上がり屋上の扉を開けた。
泉朱音は息を整えている。多分全速力だったんだと思う。
泉朱音に合わせて走っていた俺は少し息が上がっていたけど、すぐ
元通りになった。

まだ手は繋がれたまま。

荒い息をしながら泉朱音は俺を見た。そして今までとは全く違う笑
顔を向けた。

余裕のある笑顔でも、なにかを企んでいるいたずらな笑みでも、な
んでもない、ただ無邪気な
でも少し切なくなる笑顔だった。
泉朱音もこんな顔するんだ。。。。

俺はそう思った。そしてそのままその笑顔に吸い込まれていた。

しばらく俺と泉朱音は見つめ合っていた。そして泉朱音は何かを思
い出したように俺の手を離した。

「あ、ごめん。」

もうあの笑顔はなかった。

「別にいいよ。」

少しの沈黙。そして泉朱音は口を開いた。

「途中で手振り払われるかと思った。」

「……。」

俺はなんといえはいいかわからなかった。

泉朱音はフェンスの近くに行く。

「別にフーマを巻き添えにしようなんて思ってなかったんだけどさ
ー。目合っちゃった瞬間無意識に手つかんでたわ。ごめんね。」

ちょうど鐘が鳴った。でも俺も泉朱音も動かなかった。

「いかないの？」

「……まだ話してるじゃん。」

「そっか。フーマは優しいね。」

また沈黙。

「あのさあ。」

沈黙を破ったのは俺。泉朱音に近づきながら話し出す。

「俺はさっきのアンタらのケンカで俺の名前が出てきたのか知らな
いけど、アンタが話したくないならべつにいいけどさ、なんで俺を
見てた時泣いてたの？アンタはあんなケンカで泣かないでしょ？」

泉朱音の体がすこしビクつとなっていた。

「俺はアンタと面識も今までなかったし、そんなに親しくないから
さちよつとびっくりした。でもアンタに手ひかれて走ってた時は楽
しかったよ。」

泉朱音は振り返った。顔が少し赤かった。

その顔の赤さは泣いていることがバレて驚いているのか、さっきのケンカを思い出して怒っているのか。

「あたしは陽太となんか付き合ってない。あたしは好きなように生活してるだけ。1人でも別にいいの。陽太が勝手に一緒に生きてただけ。そこから仲良くなってあたしが唯一なんでも話せる人になっただけ。なのになんであたしが陽太に悪影響与えてるとか言われないといけないの？」

泉朱音の声はだんだん震えていた。

「それでそのついでになんであたしの好きな人までばらされなきゃいけないの？」

その言葉になぜか驚きはしなかった。

「あたしがこんなだからって何してもいいってわけじゃない。」

泉朱音の目から涙がこぼれた。1粒だけ。

俺は気付けば泉朱音を抱きしめていた。

初めてのサボり。そして(前書き)

更新速度遅くてごめんなさい)・・・)

受験勉強に追われてます(笑)

この前コメントきててめっちゃ嬉しくて1人でニヤニヤしてました

(笑)

本当にありがとうございます!

これからも頑張ります

初めてのサボリ。そして

泉朱音は拒否もしないで俺に抱きしめられるままだった。
そのままお互い無言になる。
俺もなんとなくしゃべりたくなかった。

「フーマ？」

しばらくして泉朱音が口を開いた。

「ん？」

「あたしこれからフーマと一緒に歩いていい？一緒にいていい？」

「別にいいけど？」

「きつと嫌な噂立ちまくるけどいい？」

「所詮中学生の噂なんて大したことないし。」

「かなり迷惑かけちゃうけどいい？」

「迷惑かどうかなんて自分で決めるし。」

「本当にいいの？」

「いいよ。てか逆になんでダメなの。」

そういうと泉朱音は俺の肩に顔を押し付け、黙った。

「どしたの？」

無言で首を振る。

「すこし・・・このままでいい？」

「別にいいけど。」

そういうと泉朱音は俺の背中に腕を回した。

俺は顔が赤いことと心臓の音が激しいことがばれないか心配だった。
しばらくして泉朱音が俺から少し離れた。

「ありがとうフーマ。大好き。」

少し涙目になった赤い顔で笑う泉朱音。

その笑顔も俺は絶対忘れない。

その時チャイムが鳴った。

「どうする？授業行く？」

「あー、気まずいしこのままでいーや。」

そういうと泉朱音は少し驚いた顔をしてまた笑った。

「やった！」

何がやった？つと思っただけど俺も笑った。

その時屋上のドアが開いた。

「やっぱここにいたー！」

牧陽太だった。

「あれ？あんたが和泉風磨？」

近くでみても整った顔をしている。

「俺、牧陽太！朱音と仲良しこよしなのね！よろしく。」

見た目の割にはかなり人懐っこい。

それが第一印象。そしてこれが陽太との出会い。

多分周りに言わせるところから俺の人生は変わったんだと思う。

今思い返せば俺らの中学校生活はかなり不良ぶってて厨二病みたい
ではかばかしかったけどかなり青春だったと思う。

とかいっても俺には少し嫌な思い出がたくさんだけ。

初めてのサボリ。そして（後書き）

なんかグダグダで申し訳ないですm（――）m
あとからまた編集しなおすかもです（笑）

放課後（前書き）

ここからは現実に戻ります（・・）
ちよこまかと時間軸（??）が変わってごめんなさい（；-；）

放課後

「風磨くん？」

陽太に声をかけられて我に返る。

「あ、ごめん。ぼつとしてた。」

「とかいって、どうせ泉朱音のこと思い出してたんだろ？」

「・・・こいつは痛いところをいつもかなりの確についてくるなあ。」

「なああたりだろっ？でしょでしょ？」

「うるさい。ウザい。気持ち悪い。」

「うわー。風磨って女子の前ではにこやかだけど俺の前では絶対悪魔だよなあ。俺かわいそ。みんな絶対風磨の優しさという名の嘘に騙されているな。」

「言ってることが意味不明ですけど。」

屋上で陽太と知り合ってから俺らはよく一緒にいる。

なんだかんだでこいつもいいやつといえればいいやつなのだ。

・・・まあ女にはだらしがないけど。

「なあカラオケ行こうぜカラオケ！！」

「お前と2人だけでは絶対行きたくないわ。」

「とか言っついてきてくれるくせにっ！ツンデレ風磨」

「お前土にかえれ。」

そんなことをいいながら結局俺らはカラオケへと向かう。

「な〜俺さあ髪の毛黒に戻そうか悩んでるんだよねえ。」

歩いているとき陽太が髪の毛をいじりながら言いだした。

陽太の今の髪の毛は明るい茶色をワックスで盛っている。見るからにチャラ男だ。

「何、？杏里ちゃん とやらの言われたの？（面倒くさい女だな）」

「そ。なんかチャラチャラしてそうで嫌なんだって。」

「・・・別に髪の毛が黒くても外も中身もチャラチャラだったけどな。そんなことを言ったらまた「鬼畜風磨」だの「ツンデレ風磨」だの言われる気がしたのでやめといた。」

「・・・別にどっちでもよくね？(どっちでもチャライし)」

「だよー！でもしなかったら別れるとか言い出しそうで面倒くさいんだよなあ。あーでもせっかく茶色にしたのになあ。」

「グチグチ悩むな。鬱陶しい。」

「ヒデーな、おい(笑)風磨はずっと黒だよなあ。」

「ああ・・・うん。」

「金とかにしてみたら？似合うよきつと。」

「ああーうん。考えとく。」

「てか男2人でカラオケってなんか嫌だな(笑)女子よぼーぜ女子！」

「また浮気だつて言われて別れるぞ。」

「杏里ちゃんはそのういうこと気にしないタイプだと信じるー。」

「はいはい。でも俺女子と絡まないから。絡むならお前1人でやって。」

「えー！仕方ないなあー！」

そういつて陽太は女の子のアドレスがたくさん入った(多分誰が誰だかわかってないであろう)

携帯を取り出した。

『風磨はずっと黒だよなあ。』その言葉に少し反応してしまった。

・・・別に色変えるのが面倒くさいだけだし。

そう自分の中で言ってみる。

「よし！リサちゃんとあやちゃんがくるってー！カラオケの近くにいたから入り口前で待ってるってー！」

陽太が電話を切ったあとニコニコしながら言う。

「俺別れてもし〜らね。」

「んなこと言うなよ！別れねーっての！」

・・・そう。面倒臭いだけ。黒にこだわってるわけじゃない。

大嫌いな女、泉朱音のことを頭から振り払った。

そして俺らはカラオケへと向かった。

放課後（後書き）

文をまとめる力がほしいです）、・・・（）笑（

放課後

「牧おそーい!!!」

カラオケの入り口の前にはスカートをギリギリまで上げた女子高生が2人立っていた。
チビとでかいやつ。

「ごめんごめん。」

牧はへらへらした感じで笑顔を振りまく。

「・・・あれ？」

「そだよー。そんな露骨に嫌な顔すんなってー！せつかくの美形が台無しだぞー。」

「気持ち悪い。俺帰りたい。初対面の女子とか無理。騒ぐ女子無理。」

「お前どんだけシャイボーイなんだよ！いいから行くぞ！」

陽太に腕を引つ張られながら2人の方へ向かう。

「あれ？牧の友だち？」

背のでかい方が俺を見る。

巻かれてある明るい茶髪は肩より長い。目が大きくてまつ毛が長いけれど目の周りが黒い。

ギョルって感じた。

「そ 俺の大親友！まあ先に部屋行かない？」

「だねー。」

多分背のでかい方は地味に陽太のことを狙っているのだろう。
しっかりと陽太の隣を歩いている。

残された俺とチビの方はなんとなく顔を合わせて入って行った。

チビと言ってもそこまではないのかもしれないけど、ギョルより頭1つ小さい。

茶系の黒みしたいな髪の毛が肩まであって、そこまで化粧はしていな

いけれど色が白い。

そういえば泉朱音も色白だったと当たり前のように泉朱音のことが頭に浮かんできた。

俺はそれに気づかないふりをして、部屋にいった。

「はーいじゃあ自己紹介　みんな知ってるけど牧陽太です！いえーい」

完全に合コンのノリでマイクを持った陽太が自己紹介をする。

デカ女はいえーいと一緒に盛り上がっている。

「志藤梨沙シトウリサです！リサでいいかねーよろしくー」

リサもハイテンションでチビに渡す。

「原山彩ハラヤマアヤ！リサの大親友ですよろしくっ！あ、あやでいいよー」

そういつて俺に笑顔でマイクを渡す。

3人が俺を見つめてくる。

「・・・和泉風磨。和泉って呼んで。以上。」

「なんかクールでかっこいいんだけどー！てか下の名前で呼んでいい？フーマとかかっこいいじゃん！」

リサが笑いながら言う。

俺の心が冷えていく気がした。

その高い声でフーマと、風磨と呼ばれたくない。

「あーダメだよー。？イズミ”は家族以外には名前呼ばせないの。

てかイズミのが断然かっこいいっしょ！」

そういつて牧が俺の肩に腕を回す。

「そっかあ。じゃーイズミよろしくー！！よし歌うぞー！」

リサはマイクを持って立ち上がった。

牧も「いえーい！！いいねリサちゃん！」なんて声をかけている。

俺の肩にあった手はもう外されていた。

「イズミは歌わないのー？」

マイクを手放さないリサが叫びながら言う。

「いい。」

「つれないなー！」

「まあフ・・イズミはなかなか初対面の奴の前では歌わないもんないー！！リサちゃんデュエットしようぜー！！」

「いいねー！！」

なんて言ってまた歌いだす。

さつきからこんな調子だ。俺はため息をついてジュースを飲んだ。

「イズミくん？」

隣から声をかけられる。アヤだ。

「はい？」

「和泉くんってさ、人見知りするタイプなの？」

「あー・・・。うん。」

そんなこともないけど面倒くさいからそういうとアヤはにっこりと笑った。

「そっか！あたしもー！自己紹介とか超緊張しちゃって変なテンションでやつちやつたんだよね。変じゃなかった？」

「あー多分大丈夫じゃない？」

「そっか、ならよかった。」

そういつてアヤはまた笑った。

「リサはすごいよねー。明るくてさ、初めて会ったときびっくりしたもん。」

これはなんか相槌打った方がいいのかなーなんて考える。

「うーん、俺もびっくりしたよ。」

「・・・だよなー。でもリサってすごいいい子なんだー。」

「・・・へえ。陽太もチャラいけどいいやつだよ。」

「あー！確かにチャラいよねー。」

「うん。あいつの言ってることなんて半分は信じてないもん。」

そういうとアヤはまた笑いだす。

「なんか、結構和泉くんって話しやすいねー。」

「・・・そう?」

「うん!ね、お友達なるうよー!」

「・・・別にいいけど。」

「やったー!じゃあさ、握手握手!」

そう言っただけで俺の手を握る。それを見たりサが

「あー!アヤ、イズミと手つないでるし!抜け駆けすんなあ!」

と叫んでいる。マイクを通してはいるからかなり声が大きい。

アヤは笑って

「お友達になりましたあ!」

なんて言っている。

「ずっーい!」

「まあまあ!リサちゃん俺と仲良くしてりゃあいいじゃーん!」

なんて陽太が言う。んなこと言ってるから女子が勘違いするんだろ

ーが、アホ。

「あー喉からっからあ。」

「リサちゃん歌ったもんねー」

「本当!いいストレス発散になったわあ。」

「また今度歌おうよー!デュエットとか!」

「いいね!」

カラオケを出て陽太とリサが前の方でそんなことを話しながら歩いている。

俺はアヤと無言のまま歩いていた。

「あれ?」

アヤが不意に立ち止まって俺を見た。

「ん?」

「財布。あたしどこいれたっけ?」

「は?」

アヤが鞆の中を探し始める。陽太たちは俺たちに気付かず先に歩いている。

・・・まあ後で追いつくからいつか。

俺はアヤの隣で財布を探すアヤを見ていた。

「あつた？」

「・・・ない。」

「まあ今出てきたばっかだし戻る。」

「ごめんね。」

「ん、大丈夫。」

そういつて陽太にアヤがカラオケに財布を取りに行くことをメールで伝えておいた。

カラオケに戻ると店員さんがすぐに財布を持ってきてくれた。

アヤは何回もお礼とお詫びをして店を出た。

「ごめんね、和泉君付き合わせちゃって。」

「全然いいよ。よかったね財布。」

「うん、ありがとう。」

「あ、陽太たち駅にいるって。」

「わかった。本当ありがとう！」

「いいつて。」

そしてまた無言で歩き始める。

「あ。」

またアヤが足を止める。

「え、また？」

俺がそういうとアヤは笑った。

「違う違う。ね、アド交換してなかったよね？してくれない？」

「ああ、いいよ。」

そして俺たちはアドレス交換をした。

駅について陽太たちと合流してすぐに別れた。

「アヤちゃんいい子だったなあ。」

「しらねえよ。おっさんか。」

「んなこと言つて仲良く話してたじゃん。」

「そーでもないから。」

「照れんなつてー。」

「お前こそリサちゃんだかと仲良かったじゃん。浮気と勘違いされんなよ。」

「大丈夫だつっーの。」

「どーだか。」

「なんだそれ！お前こそ頑張れよ！」

「何をだよ。」

「さあ じゃあなー。」

「あー。」

そういつて陽太と別れる。

少し歩いてから携帯が震える。

アヤからだった。

『アヤです（^^）さっいはすいません（；；）ありがとっ！ごめん
ました』

俺はしばらくその画面を見つめていた。

放課後

返信した方がいいのか迷ったけれど一応

『全然大丈夫。最近の世の中は物騒だから気をつけなよ』
と送っておいた。

するとすぐきた返信。

『物騒って！（笑）やっぱ和泉君はおもしろいね（> <）』
・・・これってメールが続くパターンだな。

俺はため息をついた。

基本陽太とでさえもあまり長くメールしない。

だからといって電話も好きではない。電話は相手の顔が見れないし、しゃべるタイミングがわからないのだ。

それを陽太に言ったときは「何歳のおっさんだよ！」と笑われたけど。

でもまあ返信しないと失礼だし・・・でもこれってなんて返せばいいんだよ・・・。

『おもしろくはないよ。けどありがとう』

返しようがないメールになってしまった。だけど俺もあまりメールしたくないしこれでいいか。

するとまたすぐ返信。

『どういたしましてっ（笑）和泉君は好きな音楽とかあるの？』

『俺は邦ロック系だよ。』

『そうなんだ！あたしはJ・POPだよ！』

『へえ。』

『あたしも今度聞いてみるね！』

『うん。聞いてみて。』

『おすすめとかある？』

『俺の好みだからあまりお勧めとか言えないけど、俺はRABWOMPSTって言うやつが好きかな。』

『そっか聞いてみるね!』
『うん』

そんなやりとりが続く。俺も切り方がわからず気付けば8時を回っていた。

親はあまり帰ってこないのでも夜ごはんはいつものように軽くカップ麺を食べて終了。その間もアヤとメールしていた。

『和泉君は勉強とか得意?』
とか

『和泉君の好きなおかずは?』
とか聞かれるので俺はそのたびに

『普通』
とか

『玉子焼き』
と答えていく。

そして10時になったところに

『じゃあこんなに長くメールありがとね(*^^*)お風呂入ってくるから切るね!おやすみ!』

ときた。俺も少しホッとして
『どういたしまして。おやすみ。』

と送って携帯を閉じた。こんなに長くメールしたのは初めてで肩が凝った。

少し息を吐いて目を閉じた。

今日はなんであんなに泉朱音のことを思い出したんだろう。あんな最低女のことなんか。

そう思って目を開ける。ちょうど陽太からメールが来た。

『明日って宿題とかねーよな!?!』
あいつが宿題を気にするとは珍しい。

『ないけど。なんかあったの?』

そう送るとすぐ返信がきた。そういえば陽太もメールを打つのが早い。

『いや次数学の宿題忘れたら荷物持ちさせられっから(×0×)』
『そういうことか。』

『馬鹿 (ばか) だな。』

『ふり仮名つけんなwwまあありがたいけどさwじゃあさんきゅー
な。おやすみzzz』

『おやすみ。』

陽太とのメールを終えて何気なくアドレス帳を開いた。

陽太とアヤとクラスの友だち。そして・・・

「いずみあかね・・・。」

一番最後に出てきたのは泉朱音という文字。

削除したと思っていたのに・・・。

泉朱音との最後のやりとりのメールまでしっかりと残っていた。

アドレスには俺と陽太の名前が入っている。

もうこのアドレスは変更されているだろうか。もしメールを送ってもまだ泉朱音に届くのだろうか。

一瞬そんなことを考えた。

そしてそんなことを考えた自分にイラついた。

「・・・寝よう。」

俺は携帯を放り投げてベッドに入った。

風呂に入る気力もない。明日入ろう。

ベッドに入って息を吐いたときとても疲れたと感じた。

そして目を閉じたとき一瞬だけ泉朱音のようなアヤのような人が頭に浮かんだ。

だけど俺はすぐ忘れて深い眠りに落ちた。

放課後（後書き）

久しぶりの更新なのにこんなにかよ！って

感じですね（笑）

今年もよろしくお願いします）・・（b

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3756w/>

君が

2012年1月3日03時48分発行